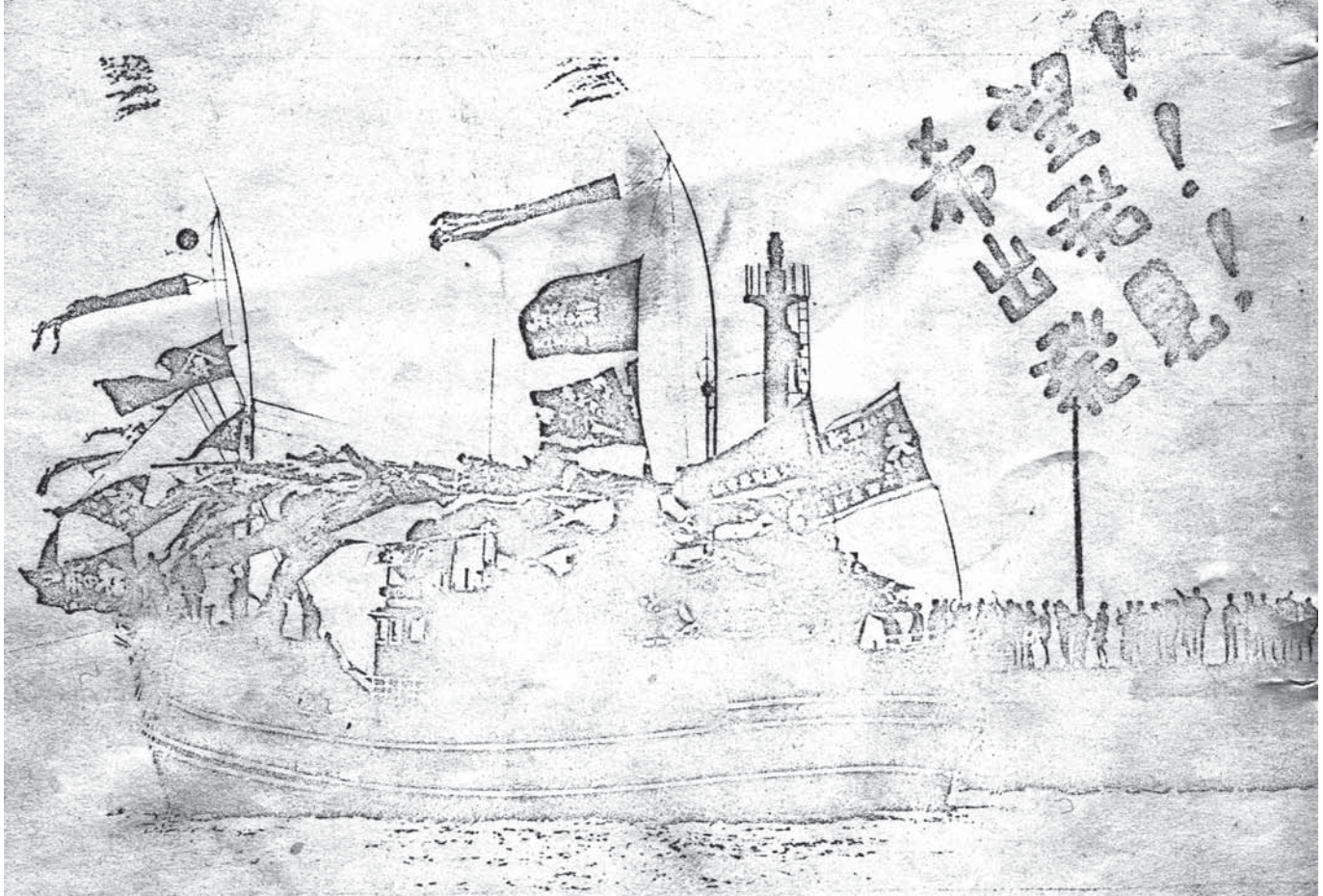
3F三敬新聞



あらゆる喜び　ひとつびとつの喜びが
君にとって　君自身の日の出であるとき
　すべては君のもの
光に満われ　前方にはこぼれるその日その日が
君自身の夜明けとして来　君自身の昼であるとき
　毎日が君のもの
すべての花々のかがやきが　君自身から咲き出るとき
すべての花々のかがやきが　君のもの
地上のありとあらゆる薔薇のつぼみが
君自身のうちで花となるとき　それらは君のもの

谷間と山々とにあるものが　光に充ちて君の心に映るとき
それらすべては君のもの
もし君が　遠い空　はるかな星のかがやきのかわりに
　君自身のかがやきを持つなら
空さえも君のもの　星々さえも君のもの

最終号

もくじ

先生から3F諸君へ！

杉先生 ----- 1頁
芦沢先生 ----- 2頁
石崎先生 ----- 3頁
堀田先生 ----- 4頁
津本先生 ----- 5頁
木村先生 ----- 7頁
(順

文芸らん
18頁～ 17頁

三敬つり情報
18頁

大評判
連載小説 あまりにも ③
19頁～ 21頁

ごぞんじ
武士 対 vs. 忍者 ③
22頁 ～ 23頁

ひとりひとこと
24頁 ～ 27頁

ささやかな あとがき 27頁

F組紳士録

杉仁

〜ない智恵をふりしぼって一寸失礼を〜

一寸渋い声が独特の味
準勤賞の青木敏雄君
皆、

46年度普3F組大学入試突破決定第一号の青島良和君
がっちり眼鏡で肩振ってのっしのっし
と阿久津俊昭君
井の濡れのように細い口からにこにこ
話が流れる井口哲夫君
せいたかのっぽにオーバーが目立った
(脱いでも目だつよ)池田博君
ドアの近くで、山岳ドカ靴岳人的哲
人伊月浩君
風っ飛びそうに細くて、それでも永持
ちした、井上雅由君
剣道一筋いつも声のかかる人気男
上野仁君
拳法やっても、やっぱりマルマルと…
梅原和彦君。

オーサワユータロー男でござる、副組長ご
くろうさん大沢裕太郎君
とってもキレイなお姉さんもってしあわせ
だぬー大島起夫君
イングリュシュスピーキングクラブに彼あ
リ！大橋仁美君
三年生の時皆勤賞残念でした。ハシカだっ
たってぬー沖島祥介君
マンガの被写体といたしまして厚き御礼を
申し上げます小堤正一君

〜次の次の頁に続きがあります〜

後(つづき)から やられて鞭打っちゃたってねー　乙黒幹雄君
無事でよかった。
「武蔵国岩槻郷の住人　金森の……」　金森謙二君
と名のれば古武士の風格
ニコニコしながらラストスパートやったね　木下徹君
ファイン、キック！　大学でもやるね、きっと　駒崎尚宏君
奇跡の人！　よくもまあがんばったね　斉藤邦男君
部活動中興の英主
いつもリュウ！リュウ！呼ばわりですまん　斉藤竜也君
竜のごとく走れ！
顔にかかる髪かき上げるな、よく似合ったね　佐々木康雄君
島村なくして文化祭なし、毎年がんばったね　島村延宏君
ごぞんじ、清水港の一番の男　文化祭もや　清水一君
ったね　皆が「おっ！」
旺文社が「かっ！(佳)」とおどろき　霜田勝美君
とおどろいた。
月柱にもたれりゃーおととしの――　菅野重雄君
いい絵かいたんだってねー「未完の幻想」　杉沢智昭君
折紙つき。
独特な形の口からサワヤカに流れ出た言葉　鈴木秀幸君

体操部の重田、地理の重田　重田の体操
部　重田の地理　重田雅敏君
いい腕みがいたんだってね――　ハワイで
活躍いいね――　瀬古伸弥君
ヒョーショージョーキミハよく努力して
髪の長さの限界にいどみ……妹尾雅行君
ペンをもたせればすゲ鉄人を射ること　高島盛雄君
8ムゲン
無言のうちに貫きとおす意志の人　高原俊善君
体育祭実行委員長そして修学旅行歌集カット　武井俊憲君
のボディラインは泣かせたね
ダンチョウサン！　oh's　応援団長さん！
風格だね――　竹内孝男君
いつもクラスにユーモアを振まきつづけ　千代孝男君
た人、これからもね
生徒会副会長、いろいろ大変ごくろうさま　角田匡君
でした。準皆勤賞の
WBS！WBS！　こちら早実放送局　月村昭君
黙々と細い体でがんばったね　仲川雅治君
かれが一九六九年に高校生だったことは　中村修二君
……
哲学的風貌の信州人。この人も記録の限界に挑戦？　西沢正雄君

ヒョーショーショー、君はよく努力して髪の短さの限界にいどみ……　野口冒孝君
運券管理委員　二年間ごくろうさま　野島輝昭君
ラグビー部です、鼻折れんほどの猛走は関東一！　芳賀誠二君
テニス部早朝練習で苦労したのかな？　畑ケ山清治君
「髪に白いものが……！」
「救急情報！本日午後二時国立の市道で軽乗用車と……無事でよかった」　原俊明君
「スミマセンぼくヒラシタですが、」　軟らかさに芯が一本貫いている　平下一郎君
水泳部です。泳ぎぬきました　無事ゴール　古山博君
イン！
窓を背中に細い目で。スパイクもきいたね　松島勝君
マワタリワタル！バスケット主将　馬渡渉君
ナイスシュートの
「ケンチャーン！先生から電話よー！」　茂木憲司君
将軍家に柳生あり、新聞部に柳生あり　柳生貴也君
文学部に柳生あり
図書委員会永年勤続委員　何年間もごくろうさん　山田雅春君
静かなユーモリスト、コーガイの　渡部薫君

そして最後に足の骨折がもとで残念でしたね、桜美林でがんばった渡辺杏実君
……みんなさようなら
一九七一・三・十五

〜おわび〜
杉先生の予想以上の御熱筆が我々編集員の手落ちから目次にないページが出来てしまった事を深くおわびいたします。

恋自体に飽きがくるからこそ二人は遊びに出かける必要があるのだ。
永遠の恋とはただ二人が共にいるということだけで満たされるものだ。

ただ二人で並んで立っている。
そうした行為によって二人が「何か面白いことないかしら」というふんい気になったら二人の恋は終ったのだ。
恋によって青年が生きているというのは二人一緒にいるということだけで胸がときめくということだ。

（加藤諦三「愛すること愛されること」より）

覗き見た普三下

芦澤雄平

十人十色と言うか、ともかくもいろんなタイプの人が居ましたな。謹厳実直型、不言実行型、有言不実行型、要領型、知性型、鈍重型、機敏型、居眠り型、反抗型、遅刻常習型、初めて型等々。こうして並べてくると、いかにも怠け者の多いクラスのような印象を与えそうだが、何故さらあらず、どうぞ誤解なきように。おのずからあるどのタイプがどの位かは、諸君一人一人はどのタイプであるかの分りの筈。

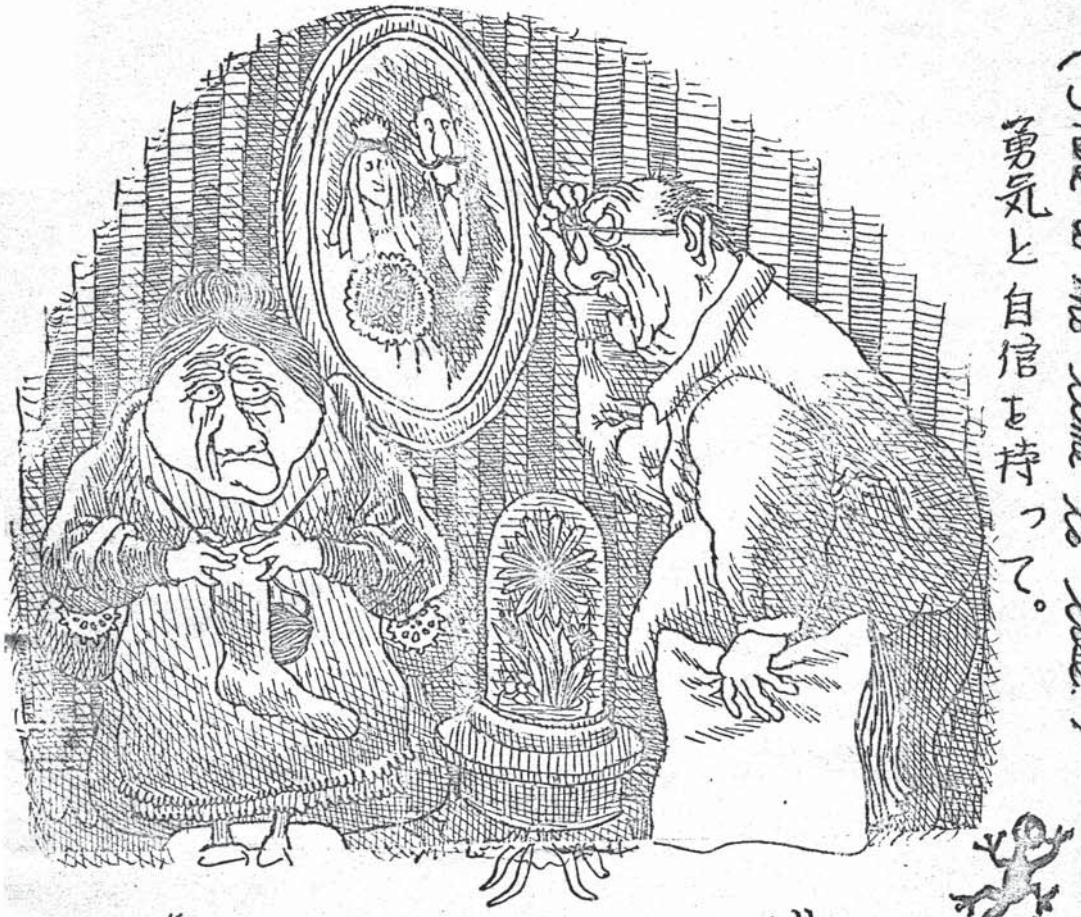
したかな？――――そしてまた今後どのようなタイプを選びますかね。

それはそれとして、それぞれの個性を持った諸君が、それぞれの分野に散って行く。三月という月はね。十年、二十年後の諸君を想像するだけでも充分ひまつぶしいやこれは失礼！とても愉快ですな。更ら説教などするつもりはさらさらないが、なにはともあれ、健康にだけは、無くれぐれもご注意の程を。かく言うそれがしも まだまだ迷いぼれはしませんからね。

さあ出発の時刻ですよ。ぐずぐず出来ませんぞ。

(There's no time to lose.)

勇気と自信を持って。



"Wait a minute… that's not me!"

三敬新聞 祝卒業号ならびに終刊号に寄せる

ささやかなことば

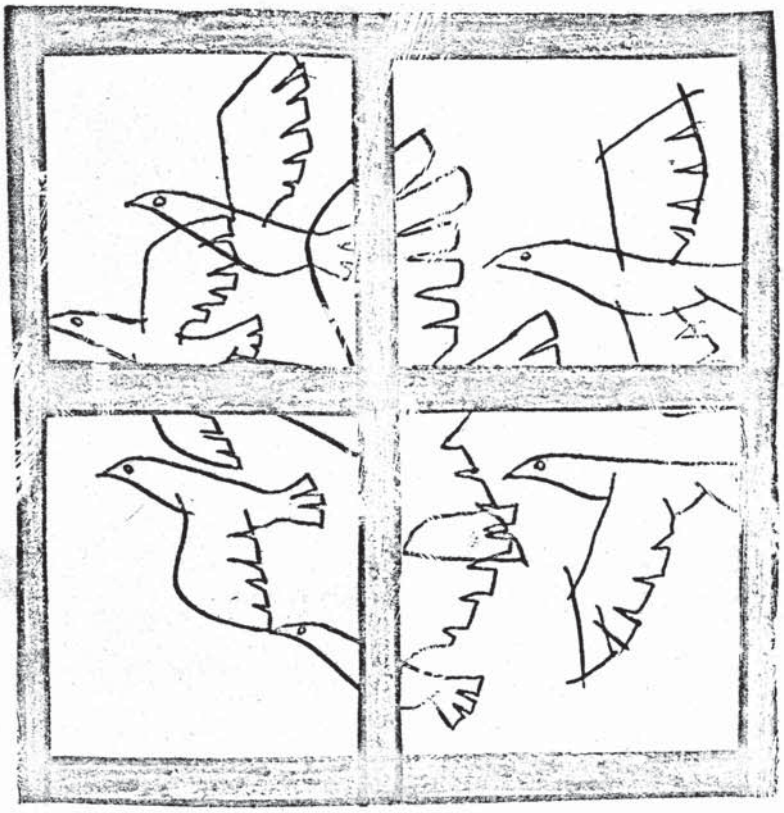
石崎 等

卒業できるということは、平凡ながらやっぱりおめでとう。ではないだろうか。ぼくにとって、成人式よりも印象に残っているのが高校卒業だ。制服・制帽もいらなくなり長髪も自由、ちょっぴり大人の真似ごとができるのがおめでたいことでなくてなんであろう。

束縛されて手も足もでない
うつろな青春。
こまかい気づかい故に、僕は
自分の生涯をふいにした。
あゝ、心がただ一すじに打ち込める
そんな時代は、ふたたび来ないものか？

A・ランボオの詩の一節。《青春》は違ったことを認識するとき、再来しない意味を帯びて大きくふくらむ。

へこまかい気づかい〉による悔恨のない旅をめざし、さあ、力強く出発してほしい。



鳥は飛ぶ　大空を求めて

えげつない論理

堀田秀夫

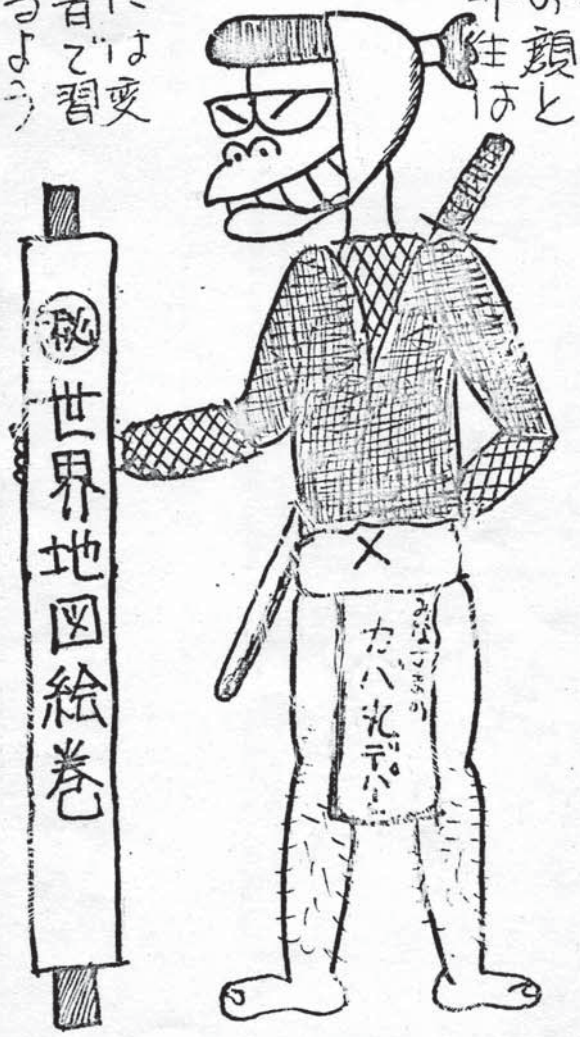
いや、とにかくおめでとう。御両親もウハウハ慶ぶよ。まあしかしよく卒業できたものですよと、一言皮肉を言うあたり忍者鹿馬五郎の性分。二年間にわたってつまらない世界史を教えた最初の学年ですから、諸君の顔と名前はよく憶えています。今の二年生はどうしたことか、未だ憶えられないのですから、諸君はよっぽど顔が悪かったのでしょう。

冗談はさておき、諸君に二、三、諸君はそれぞれの進むべき路は違うでしょうが、社会の荒波に乗り出して行くことにはなったようなこと。この社会には教科書で習ったようなお上品な道理が通じるようなものではありません。それにもうなしろもの。一つの論理が貫徹しているのです。不合理で、非理性的で、関西弁で言えば、

「えげつない」ものです。まずそれを見ぬく実力を養ってもらいたいと思います。その実力とは知識ではないだろうか。常に真実を追究しようとする姿勢を崩さないでほしい。

ともかく、非常におめでたい。何がおめでたいか知りませんが、早く出てゆけ、ざまあみろでございます。

忍者鹿馬五郎より



原点に帰れ！

津本信博

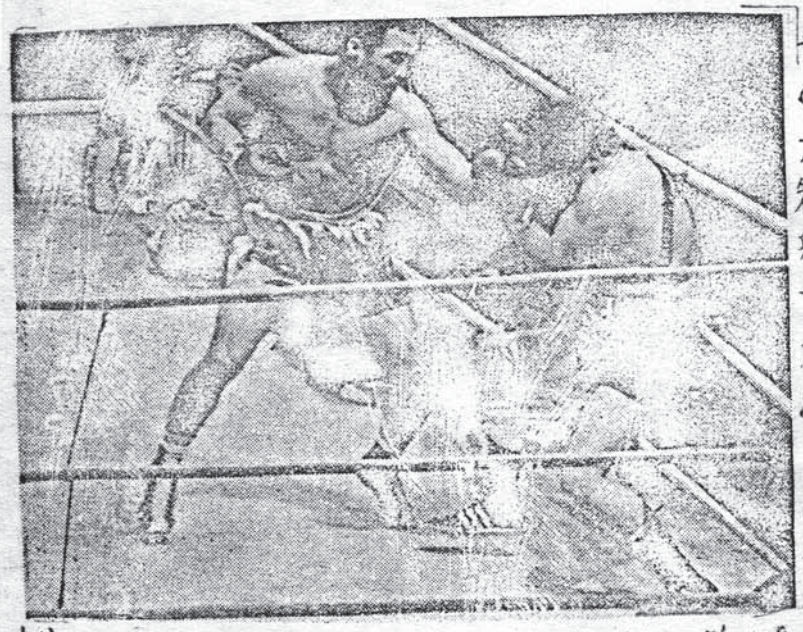
野球が好きな私は時にこう思う。何故打者は三塁へ駆けないのだと。野球ファン、ならそんな馬鹿なと一笑に付される。が、野球の面白味から言えば、高度な技術もさることながら、打てば一塁へ駆けるのだという基本に立ち戻って考えることが大切ではないかと思う。時には三塁へ駆ける考案があって良い。クラシック音楽ならベートーベン・モーツァルトだ、運命、田園、第九・ジュピターだと従来の評価をそのまま受けついで、それはいいものなんだという所から出発し、またそうなくてはならないんだと思い込み、時に我が意に反して盲従して行く鑑賞が多いのではないだろうか。カラヤンの指揮によるものならすべてすばらしいという先入観念があっては正当な音楽というものの良さは解せないのでは。彼の指揮はすべての作曲家の作品に適格かと言うと一概にそう言えまいと思う。私は私的な関係で山崎孝のピアノは必ずと言っていい程聞きに行くが、彼はやはりベートーベンが一番適していて、力強いタッチはどうも他の作曲家のものに向かない。果して作曲家の予期していた演奏と現在演じられているものを比較した時、どれ程作曲家の意図を汲んでいるか疑問だ。我々の現在大きな顔をして『源氏』や日記文学を論ずる時、作者がここに現われたら、とても恥ずかしく立っていられない。三島の自殺にしても、ひょっとすると自分でもわからないところでその行為が行われているかも知れない。あれ程続出した三島論もそれ程振躍す程のものを持っていない場合もあり得る。私のように何もわからない人にとってこれ程幸せなことはない。わからないことは強いことだ。うっかり原点に立ち帰るものなら、その問題の追求は遠大なもので、気が遠くなる。が、たえまない追求が必要なので、その際原点に立ち帰った時は従来の評価に臆することなく立ち向かってよい。

3塁へ走るんや

素朴な頭から考えて行く時、
原点に立ち帰って評価を得る場合が多い。
原点に帰るという作業
価がたまたま従来のものと一致すればそれでよい。
なしに従来のものに乗っかってそれを自分のものとして行く所に何か納得の行かないものがある。
評価は歴史とともに書き換えられて行く。

藤猛クワルトーアをKO初防衛

世界Jウェルター級・タイトル・マッチは十一月十六日夜、蔵前国技館に一万二千の大観衆を集めて行なわれたが、チャンピオン藤猛は挑戦者ウィリークワルトーアを四ラウンド2分30秒にナックアウトし初のタイトル防衛に成功した



過去の勇士

カアちゃん
この頃は
よかったな！

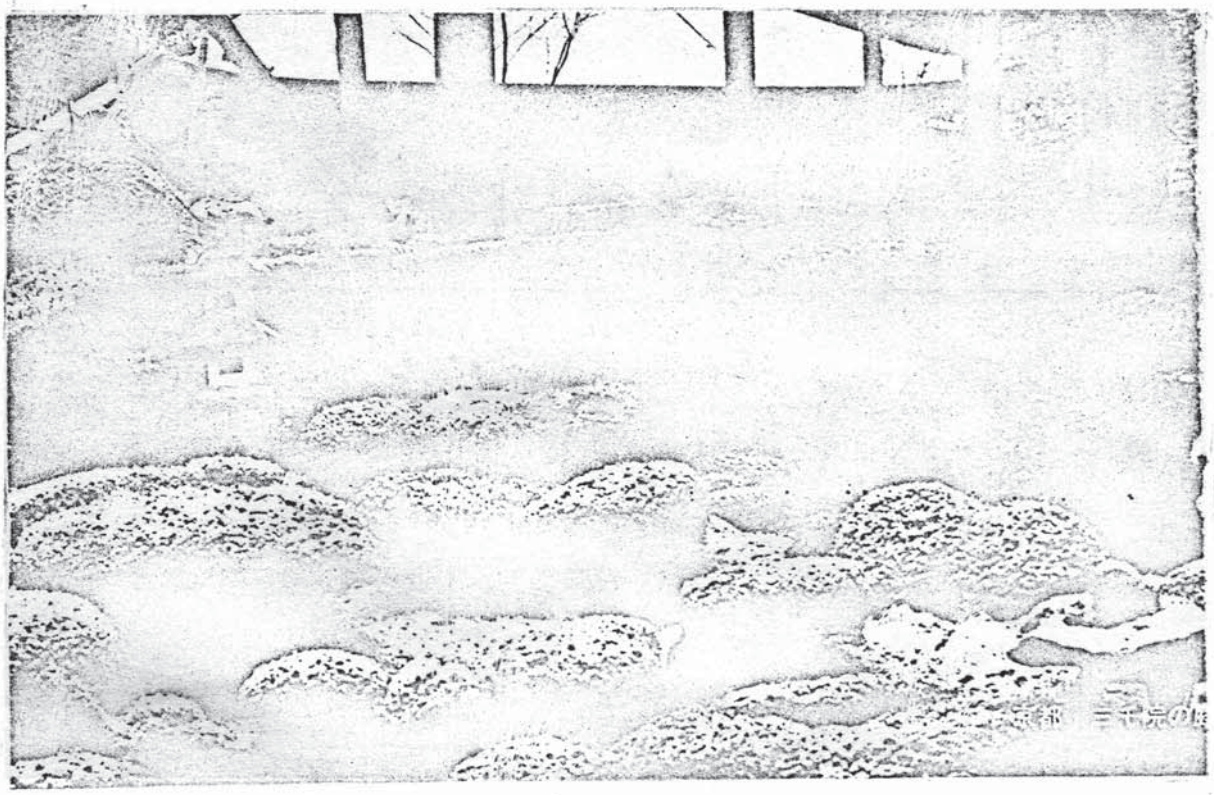
ボクシング評論家
阿久津俊昭

酒をのみながら考えたこと

木村栄一郎

私はそれぞれ自己の生き方を、他人に強制できるほど自信家ではない。人にはそれぞれの生き方があるであろう。大体私は酒もタバコもやらない。遊び事も大好きだ。自己主張、自己主体性の確立を目指して、大いに酒を飲みながら考えたことである。

酒の飲み方ならいつでも諸君に指南しよう。書きたいことは山ほどある此の辺で筆をおく。



文芸

作文

平下一郎

受験を間近かに控え、不安と焦燥とにかられ、異常とも呼べるような毎日を送っている現在である。高校時代を振り返って見ると、随分楽しいこともあったが、又、苦しいことも多かったように思える。我々の年代は絶えず社会の予看なり人間としての苦しみなどで悩み、苦しみ、煩悶している。そしてその葛藤の中で意志の弱い者は挫折するかもしれません。世代に妥協するとも言えます。かしそういう不安、悩み、苦しみが僕達に進歩をもたらし、やがては幸せを授けるのではないでしょうか。だから恐れることなくどんどん悩みましょう。又、そういうムダなエネルギーの浪費が青年の特権であり、青春というものかもしれません。まあこれから先、いろいろな事があると思うが、どんな人間になろうと、どんなものを失おうと、自分にとって一番大事なもの、それを失わないことが、これからの僕の人生の課題であると思う。

—詩—

「君」

清水はじめ

さみしい時　一人きりでいる時
なぜか僕の心に浮かぶ君
だけど　ぼや〜〜とした君
顔がはっきりしない君

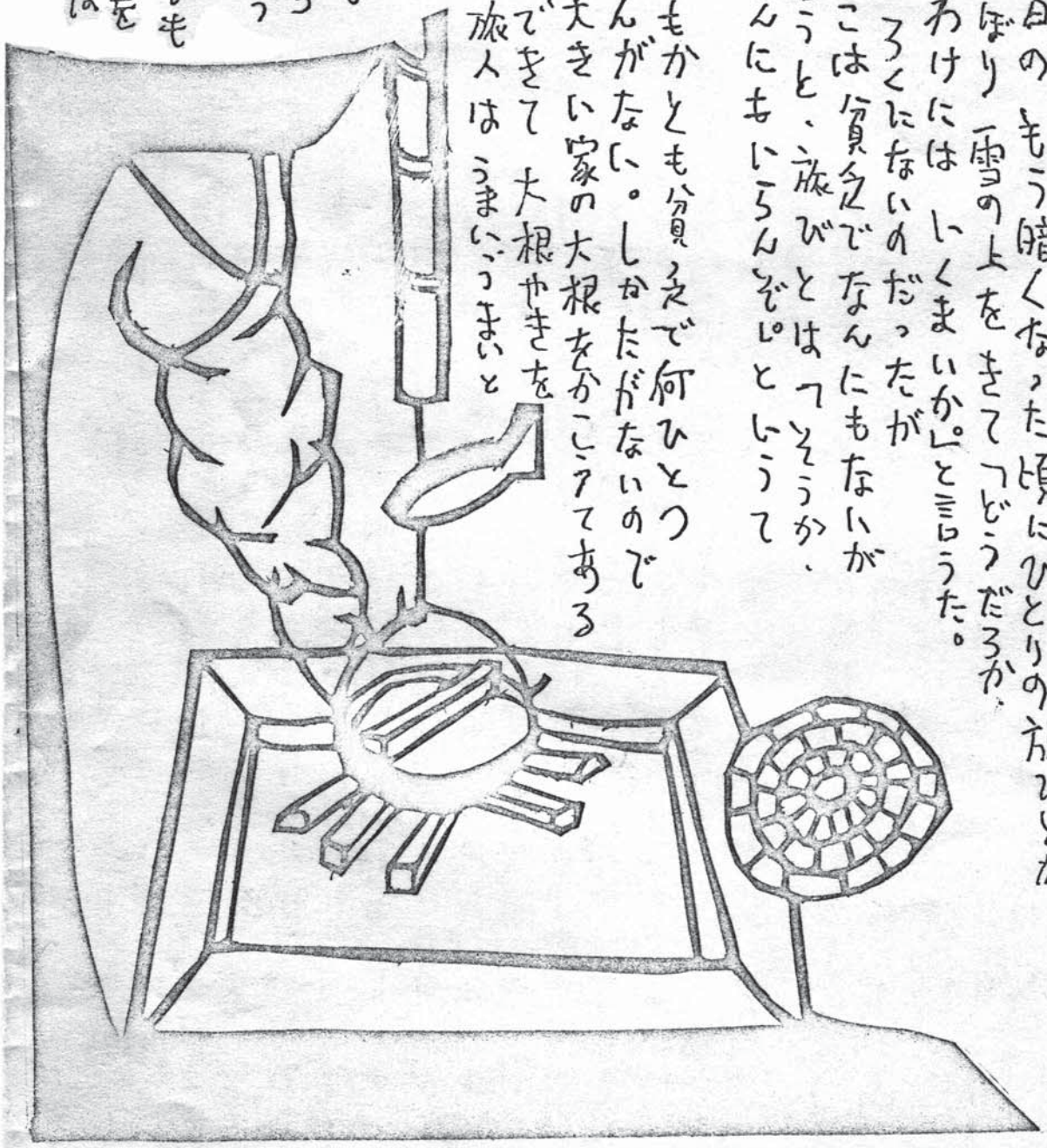
なぜだろう
君を見つめる事の出来ない僕
そうだ、きっと　そうなんだなあ
何度も何度も君の顔を思い浮かべようとすると
今までの君が　消えてしまう

民話

あとかくしの雪

山田雅春

あるところになんとも貧乏な百姓がひとり住んでおった。
ある冬の日のもう暗くなった頃にひとりの旅びとがとぼりとぼり雪の上をきて「どうだろか、おらを一晩とめてくれるわけにはいくまいか」と言うた。
百姓は自分の食べるもんもろくにないのだったが「ああ、ええとも。おらとこは貧乏でなんにもないがまあとまってくれ」と言うと、旅びとは「そうか、それはありがたい。おらなんにもいらんぞ」というてよろこんであがった。
けれどもこの百姓はなんともかとも貧乏で何ひとつ旅びとにもてなしてやるもんがない。しかたがないので晩になってから一本ぬすんできて大根やきをとなりの大きい家の大根をかこうてあるところから大根一本ぬすんできて大根やきを旅びとに食わしてやった。旅人はうまいうまいとそのた大根やきを食うた。
その晩ざらざらと雪がふってきた。百姓が大根をぬすんできた足あとをあゆむあとからすうっとみんな消してしもうように……
この日は旧の十二月二十三日で今でもこのへんでは、この日に大根やきをして食うしこの日に雪がふればおこれをたくもんもある。



「夕焼け」

伊月　浩

また、死が俺をひっぱる
すごい力だ
もうだめだ、と思った時
反対の力が俺をひっぱる
もっと強い力で
俺は顔を赤くして
そっちの方へすべって行く
君が子供のころ遊びから帰る時見た
夕焼けを見ながら

題しらず

阿久津俊昭

卒業にあたってサンケイ新聞の最終号を出されるそうでまずはごくろうさんでした。（多少ゴマスリ）
僕も二年の時この新聞を引き受けたんだけれども、って生まれたセンスのなさからか不評でしたな（やぶへび）
ところでこういう不器用な奴なので、何か書けといわれてもすぐ頭には浮かんでこない。詩なんか全然だめだし小説なんかも書けないし、よしてイラストなんかとんでもない。次第。そんなわけで勝手な事を書かせていただきます。いま一番思うことは早実に来て敗北者になってよかったと思うこと。それは多少は妥協した面もあるかもしれないけれども、周囲の人たちに対する愚の気持ちがあまりなく卒業できることが一番うれしく思うところ。これは言いかえると早実に来てよかったとも言えます。
こんな気持ちを持ちながら僕は早実からまた違う世界へと飛び立っていきます。いろいろと思い出があり書き出したらつきることはないでしょうから、書くのはこれでやめることにし、これらの思い出は、何年かたった後でのクラス会での貯金にしとくつもりです。

今宮

静かな大地に朝が来る
平和を祈る今日の訪れ
光に雲は空の上
青空破り今日も視る
工場・自動車・海の中
明日を忘れた人々は
明日を破滅し生きていく。
ああ 大地よ
我等の罪を許し給え。

《海をかんして》。

疫部 薫

（僕の意見書）

柳生貴也

やっと終ったという感じだ。莫迦〈しい無の三年間がやっと終ったのだ。今までなら、学の自由を求めながら、そこに達する前の学の束縛という境地で、独り懊悩し、学の自由の地上を飛翔阿呆鳥の如く舞ってい。そこでどうしても降りたつことが出来なかった。何故ならそれは時間の問題だからだ。そして今無事着陸する時が来たのだ。思えばこの三年間は異常だった。先日、担任が生徒の服を校則違反ということで注意していたが、この注意こそ異常なのではないだろうか。今まで我々は毎日「裏服」を来て登校していたのだ。そして大学入試の為の異常な入学試験制度、佐藤の政策、内政処理・外交の異常な極右人物、「新宿・鎌井」などの異常な赤軍派などの異

常な猪突猛進の時代錯誤など近頃一つの大きな変動期がきているようだ。「経済大国だ」などと言っている今にも既にこの様な大きな「かげり」がきている。そしてこの「かげり」が常識として通用する時、再び日本は以前の異常な時代を繰り返すことだろう。この異常な情勢の中で、我々は大学へ行く。大学はいわば、我々は大学へ世界を正面から分析し、この異常な世界を正面から分析し、打破するための研究所だ。官僚、政府、企業側の感覚を為顔をした政府と企業とは一心同体の双頭の民、全く企業側に乗せられている国民のようなものだ。そしてこんなヒみたいな連中の政策に賛成している国民は全く莫迦だ。自分等にカドミウムの公害が侵透してこない限り動かないだろう。

そうした連中の眼を開かせるのは、大学のインテリしかいない。インテリのみが真に世界を把握し対処できる唯一の存在である。

一人漫才

どこの誰だかしらないけれど、誰もがみなしっている○○○○のおじさんは……

「三下サンケイ（三敬）新聞はくだらない。先生の悪口を書き、全然似てない変なマンガを描き、社会のためになることを勉学に役立つことが全くない、こんなものを読む段があったら本当の新聞つまり全国民が愛読している産経新聞を読んだ方がましだ。遊びに行く奴も書く奴も書く奴だ。第一に顔がずい第二にはいりしている（特に釣り＝海釣り？五釣り？）第三には居ぬりばかりしている。こんなつまらない新聞へ切りかもしれない！はもう二度と読まない。だのオレの家に来ないでいたくなかったらば最ふっ飛ばしてやる。家はわからないオレが思うには……

オレがふ氏名を書いておくよ。原稿を夜おそくまで作ったりしし

試験で近所とだったりそれになにより苦労ししたいへんづいたと思う。アイデアに富んでいて、もらうのが楽そしたくみたいたアイアとみんなもそうだと思うよ。

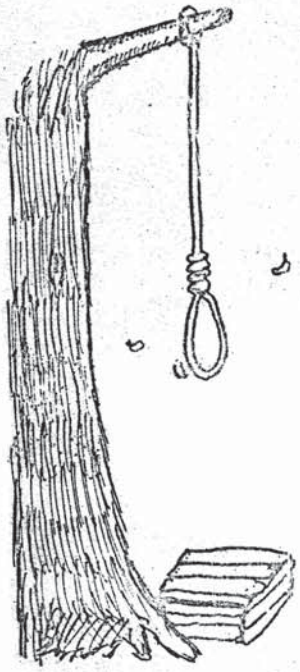
パパパパ拍手を送ってやろうぜ。でも最後の方

の「第三」はあってるかもしれないヨッ。

最後に名前は 駒崎尚宏

住所は 埼玉県蕨市中央3-12-18 〒335

「井上雅由の受験相談」



もし落ちて自殺するんだったら一服飲むよりもっといい方法があるんだ。教えてほしいだろう。殺虫剤のスプレーの口をくわえてシューシューやるの。これやれば一発で　チョしちゃうから。参考までにタケダ　ルトンがよく効くよ。

（自殺コンサルタント　井上雅由）

タケトリモノガタリ

山部青人こと小堤正一

昔々、ずっと昔、讃岐と阿波の国境近くに雲辺寺山のふもとにサカキノミヤという老人が住んでおりました。老人は竹を取って暮らしていました。その子供は60コぐらいの三つ年上の妻と二人きりでしたが、ひませんで、おくやし茶筅やザルに加工して生計をたてておりましたが、ある日、根っこ仕様のない人間で、この年になっても子供は一人もおりませんでした。

ある日、おじいさんは、竹林に向いました。

「おかしいなあ、まだ、その日もそのあくらしいという有様でした。

「ドッ、ドッ、ドッ、

すかさず欲ばりなおばあさん「ナヌッ？キン？キンがドウスタッテ？」なあに、去年の今頃北の竹林でね……」と話をするとナニデソノタケヨトッテコナカッタンダイ。ナカヌキンがハイッテイタンカモスレネエノヌ。コノログデナス。」ってなぐりあいになり、「ソノハヤスニツレテ」ッテクレ。マダ、アルカモスンネエカラ」ということで、欲ばりなおばあさんを連れて竹林に来ますと……ドゴ、ドゴラヘン？」とさがし出します。「たしかこの辺だと……あっこれかな？この竹らしいぞ、でも……ずいぶん光が薄くなったみたいだが……」と蒼白く光る竹を指さします。「ソンナコド、ドウデモイーカラ、ハヤグキリタオミデミナサイヨー！ハヤグ」とせかされて、おじいさんあわてて鉈をふりあげます。コーン・コーン・コーン・コーン・ガッ・ガザガザガザッ！ドドッ。二人はあわてのぞき込みます。「ありゃ。ありゃ！」大きな竹のその中には、なんと驚いたことに、三才ばかりの小さなせの子のミイラが入っていたのです。

青春の門

霜田勝美

ぼくは切実に生死の問題を考えたことがなかった。誰かの文章の一節にあるように、若えるには青春の血があまりに暖か過ぎる。眼の前には眉を焦す程の大きな火が燃えている。これが真の自分だと思う。ところが青春の熱血も、老いたる自然を見るにつけて、さらばえて来てしまった自然の血が調和してしまう」と、今さらのように思えてしまう。

あ、この自然に自分の血が調和してしまう」と、今さらのように思えてしまう。

青春などという言葉は、青春期に用いるにはあまりに漠然とした語かもしれない。その「青春」を、ぼくは今、あえて使いたい。なぜなら、ぼくは自身ひよっとしたらもう遠い過去に「青春」を忘れて来た老いぼれかも知れないし、まだこれから「青春の門」にさしかかろうとしている男かも知れないから。でも、今に何かやってやろうと、いつでもカッカと燃えている心境をみると、「青春」の火のまっただ中に生きているのかもしれない。

受験勉強

畑ケ山　清治

目を覚す。時計を見る。午前十一時二十二分。寝ぼけ眼の頭でサし考え込む。確か七時に目覚しを掛けておいたはずと。（昨日もこのような現状であった。）この現状が僕の日課の始まりである。起きて、歯を磨き、顔を洗い、朝食でない昼食を食べる。二時頃から勉強でもするか？

まず選択科目の世界史から始める。今日はこの辺までと予定をたてる。あくまで予定であるからして一向に進む気配がない。ラジオを掛ける。F.E.N、Good English でありますむ。その内ストーブにあたりながらボサーとしていると、すでに時計は五時をまわっている。勉強のまねごとをやめ、夕刊を見る。その内夕食である。テレビを見ながら食べる。「マズイー!!」と、心の中で思うのであります。おやじさまが帰って来て「勉強やっちょるか？」とお尋ねになる。「ーテルヨーー」と僕は答える。九時頃から英語をやり始める。英語を見るとボサーとするか眠くなる性質なので結局進展はありません。その内深夜放送の時間。「セイヤングなど」を聞く。午前二時頃非常に眠くなる。冷たい蒲団の中にもぐり込む。虚しさが体の中をかけめぐる。「アー」今の自分はただ惰性で生きているだけなのか？全くイヤになるねモー。

今日の勉強の成果!!

世界史10ページ進む。

英語

"If I have the patience to attain my object, I will be able to pass the entrance examinations."

（自分の目的を達成するだけの忍耐力があれば、入学試験はパスすることができるだろう。）

でありました。

芸術家と凡人

―最近ふと思うこと―

梅原　和彦

芸術とは、その人自身の感情の表現に他ならない。人にはそれぞれ何か漠とした外には表現できないような気持ちのうつりかわり、感

情がある。こみあげる怒り、不安、深い悲しみ、何かうきうきしてくるようなうれしさ。夏の海辺で体を焼いている時の太陽のまぶしさと心の落ちつき、充実感、けだるさ。夏昼寝をする時のたたみの感触と快い風。遠くの白い雲。木枯しの中で風にさからって歩みつづける、それはまるで荒野をめざす長い旅路のような、勇ましく孤独な歩み。晴間で饅頭を食うようなふかいなさ(夏目漱石)。孤独。焦燥感。しらけさせてはならない。何かペラペラしゃべりつづけたあせり。何かペラペラしゃべりつづけた後の空しさ……。とても書ききれない。そして書くことのできない人間のいろいろな感情。

これを音楽家、画家、文学者はそれぞれメロディーで、後で、文字で表現するのだ。(その点で彫刻にはあまり興味を持てない)この表現力が偉大な芸術家と他とを分ける。この表現ができないのがいわゆる凡人である。そしてもちろん私も凡人である。しかし音楽の面では今も多少挑戦している。

あれらはどこに行つてしまつたか？
なんにも持つてゐなかつたのに
みんな　とうになくなつてゐる
どこか　とほく　知らない場所へ

真冬の雨の夜は　うたつてゐる
待つてゐた時とかはらぬ調子で
しかし帰りはしないその調子で
とほく　とほい　知らない場所で

なくなつたものの名前を　耐へがたい
つめたいひとつ繰りかへしで―
それさへ　僕は　耳をおほふ
時のあちらに　あの青空の明るいこと！
その望みばかりのこされた　とは　なぜいはう
だれとも知らない　その人の瞳の底に？

「土原道造」

三敬つり情報

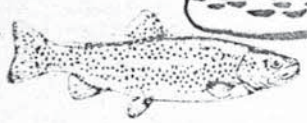
つり情報もとうとう最後になったようで、今までのを見て釣りっちまったじじいがやるもんだと思ってたけんども、若いのがやってもおかしくねえだなあと言っている君！やってみたまえ釣りは健康的で心を豊かにしてくれる。ぼくなんか、魚なんか釣れなくたって、あの太陽や波の音で満足なんだもんネ。

えーそれでは最終会は茨城県ヒ沼の釣りを御紹介しますよ。急行券をケチってドニ行で二時間ちょイで水戸駅。そこから入ってこなワニマミバスで六反田なんて所を通って三分。ヒ沼川につきました。"みそや"という釣宿に行くと人の良さそうないいさばあさん「まあ茶でも飲んでケレ」こんだから釣りはいいんだョ。

つれるものはハゼばかりだったけど、夏場には50㎝もあるスズキがやたらと掛かるとか、夏に行ったら面白いだろう。

宿に一泊した次の朝は舟頭さんを雇って同行してもらったんだけど、噂によると、ここらで腕が一番とか。川には漁舟も出入りするから大きな波が舟を木の葉の如くゆらすんだけど、ある船の通った時、例の波が押し寄せて来た。舟が向きが悪かったんだろう運悪く舟頭だけが水を浴びてしまった。○○丸のバカヤロウ、今度沈めてやっからな」その拍子に自分の竿を水の中へポチャン。「きのう寝ずに作ったんだ」とがっくり。そこで我等のホープのV君がリールを巻いていると、その竿がかかって来たではないか。「今日はお赤飯だ」の声に舟頭「そうだ、そうだ」と、頭から座ぶとんまでびっしょりの姿で笑っていた。どういう訳か、ぼくは全然濡れていないのに。

大きなハゼが入れもの一杯にしたと言うのに、"みそや"「まあこれでもみやげにそっってケレ」と、ビニール袋一杯のしじみ貝をくれる。ただには目がない我々はウハウハ喜んで、チックがぱち切れそうなカバンに押し込むと、座にはまっ赤な夕焼けがひろがっていた。



世界にのびるわれらのA.A.C

小説 あまりこ七③ 森昌信

あらすじ（中学校の友達だったかずこに突然電話をされ新宿まで出た晶信は彼女の変貌に驚き、彼女の深刻な悩みと告白の返事に迷い、このままにそっとしておこうと決心し別れた。）

もう春も近い。連載小説なんていうのはその季節に合わせなくちゃ面白くないので大変荷厄介だ。まして三ケ月位の間隔で発行する三敵新聞は話のつじつまがどうしても合わないのだ。

冬は星が綺麗だ。空が澄んでいて自分の吐く息が星まで届きそうな、そんな気がする。ミディヤマキミも夏ではちょっとと首をかしげるぼくでも襟を立てて足をほんの少し出して歩く彼女等を見ると、たとえそれが少し位似合わなくとも、なる程と感心してしまう。

図

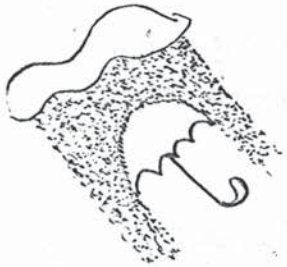
夜になってめずらしく雨が降っていた。人生の縮のような雨の道程の一ページが開かれている。詩人は夏冬の夜の雨に　にこう詩っている……。

降りすさむでゐるのは　つめたい雨。
私の午にした提灯はやうやく
暗く足もとをてらしてゐる、
歩けば歩けば夜は限りなくとほい。

私はなぜ歩いて行くのだらう、
私はもう捨てたのに　私を包む寝床し
あつたかい話も燭火も――それだけれども
なぜ私は歩いてゐるのだらう。

朝が来てしまったら　眠らないうちに。
私はどこまで行かう……かうして
何をしてゐるであらう

私はすつかり濡れとほつたのだ　濡れながら
悦ばしい追憶をなほそれだけをさぐりつづけ……
母のあの街の方へ　いいや闇をただふかく。



「出発・希望・発展、かしぼくはつうーデーとにに含みながらそれを飲み込むことも忘れて考えていた。

これからどうしよう。ゆとりある、安らぎの時間。落ち着いた、最近ぼくはこの自分の時間あとり戻す為に独りで考える事が多い。それも詩集を見ながら。

そんな時誰かから電話かかかって来た。

「はい　昌信ですけど……」

「波の音聞こえる？海にいるの。波が岩にあたって砕けてる。雨が降ってるの。冷たい雨。すぶ濡れよ。寒いとっても」

「誰なの？」

「海が呼んでるのよ。いらっしゃいわたしを呼んでるの。やさしそうだわ。」

「でもやっぱり恐い。」

「誰？服部さん？」

「海の中で静かなのかしら。やさしく包んでくれるみたい。雨が道路の上で跳ねてるわ。風も吹き抜けて行く。わたしの体から冷たい風よ。ぼの体を」

ぼくはいらだたしさを感じだした。

「なあ、服部さんなんだろ。」

「電話の何うでは聞こえているんだ。いいんだか家出して来ちゃったんだ。まだまだ。もう東京なんかにいたくない。何もかも全部だめ。わたし、もうだめだ。何をしても無駄だったわかったの。もう遅すぎるの。遅いのよ。」

「……少し独りで考えてみようと思って家を出て来たの。でもだめね。忘れようとすればするほど目の前にちらついて。忘れられないんだもん。あ寒い。」

「随分会わなかったけど、いろんな事があったんだ。」

「まだまだ子供ね。あたし。こんな事で泣いたりしてごめんなさい……」

「少し話がとぎれた。

「でもいいの。アキに電話できたんだもん。一時は死のうとさえ思ったの。勇庚ね。そうだよ、まだ若いのに生きなくちゃ。」

「うん。明日にでも東京に帰る決心がついたわ。」

「そうしなよ。帰ったら、また話しでもしよう」
「それじゃね」
ぼくは受話器を持ったまま放心したように立っていた。
何事にも中途半端な青春。けが決して2にならない青春。ぼくはこの青春の中に生きている。これから先いろいろな事があるだろう。でもこの青春がたとえ暗黒でもせめて子だけは泣かすまいと。
老いさらばえて死が訪れるまで、決して世の子を悲しませることはしまい、と。
札の前に戻ると冷たくなったプラスの中にひったくりの残りがグラスの中にひったくりの残りがぼくはグラスを取り上げ、目を閉じて一挙に飲み込むと、何だか今まで考えて来た結論が頭の中でぼっかり浮きぎれ、青春の炎が赤々と燃え出すのを感ぜずにはいられなかった。

完

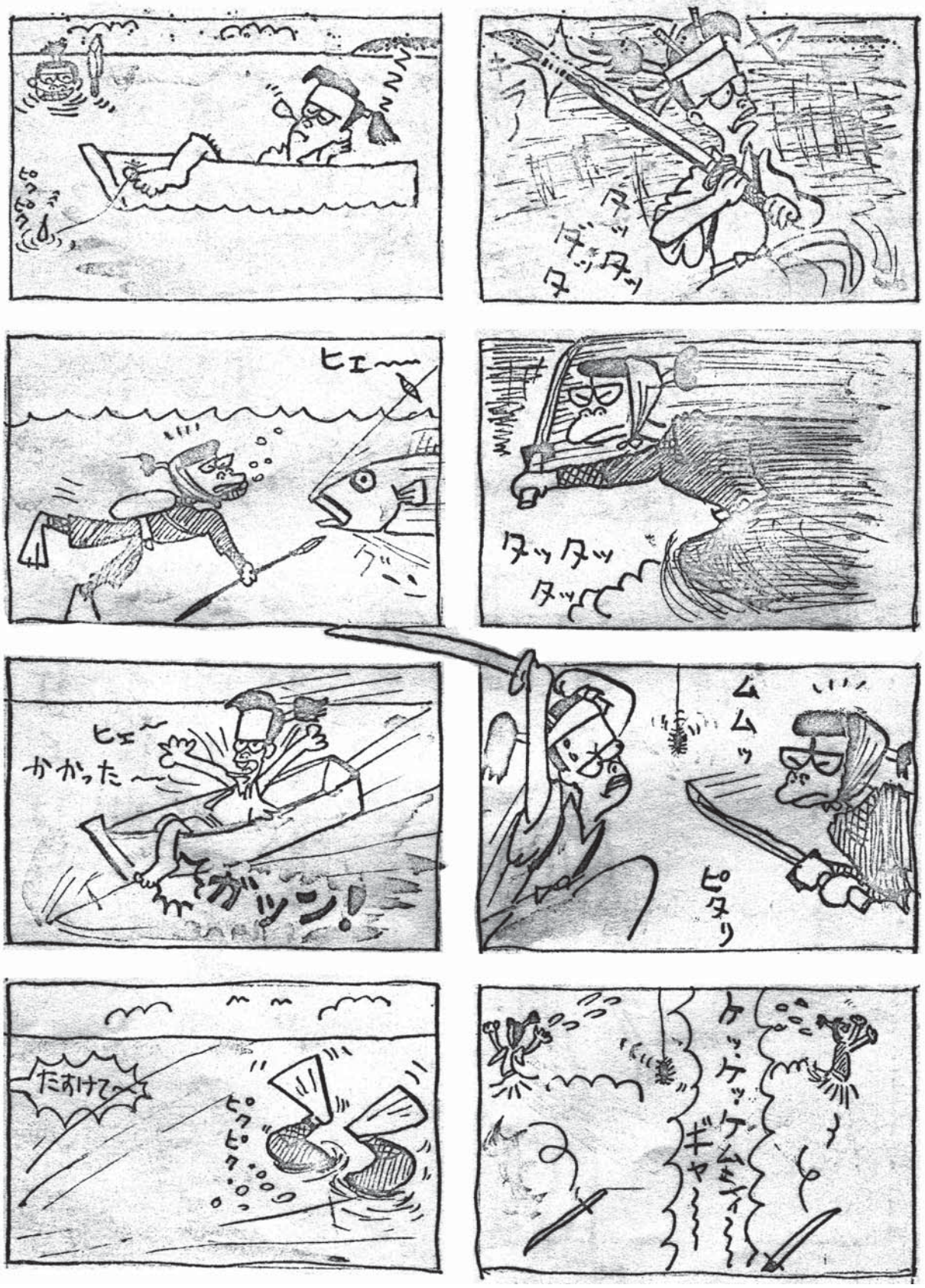
最後はあまりうまくまとまらなかったけど、ありもしない事をこれだけ書くっていうのは容易じゃない事を理解してもらいたい。

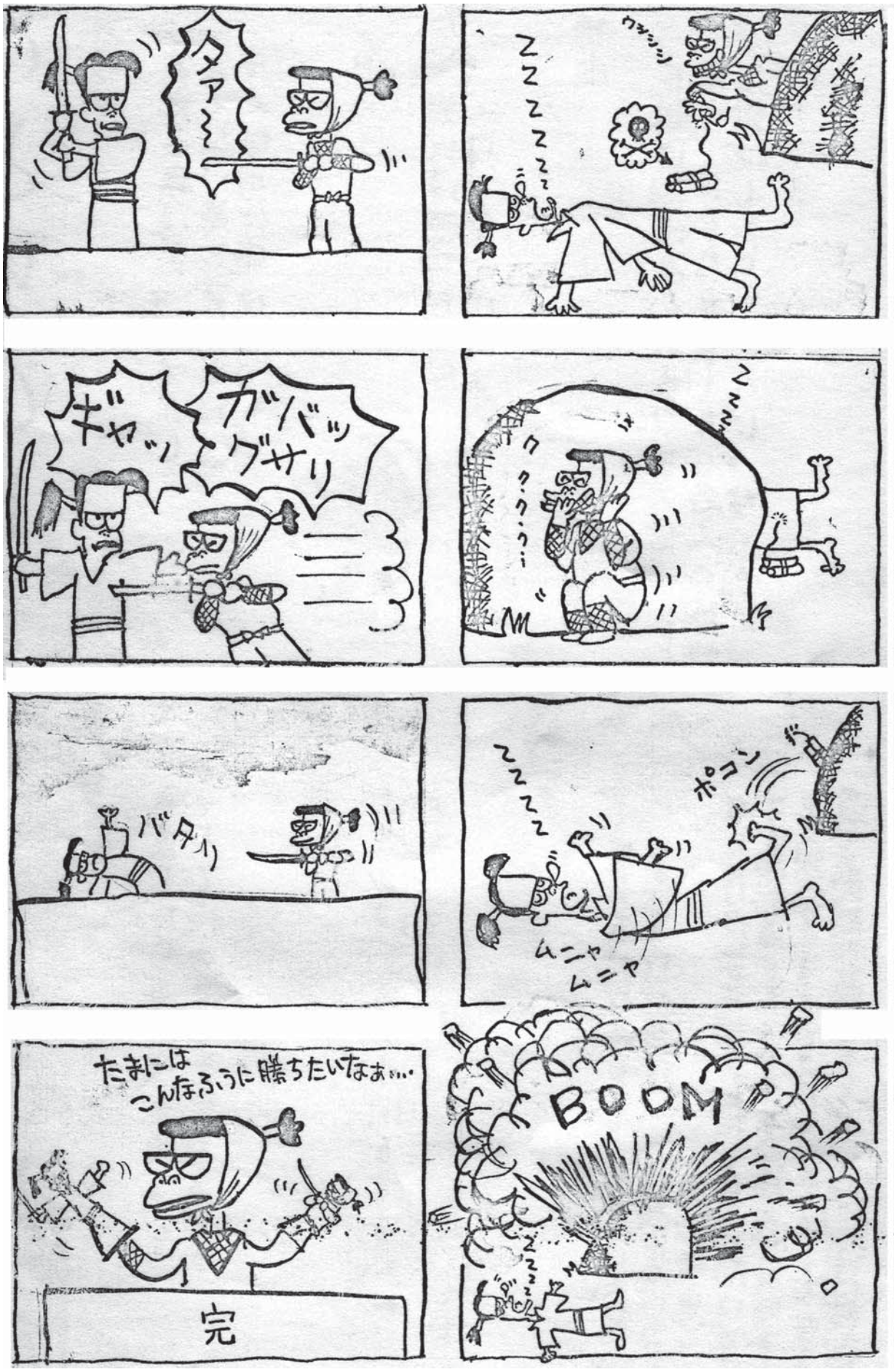
著者

ひとりで行くんだ
しあわせに背をむけて
さらば ふるさとよ
なつかしい歌よ 友よ

今
青春の
河を
こえ
青年は
荒野をめざす

武士 立寸 VS. ③ 忍者


ピクピク
タッ
ダッタッ
タ
ヒェ〜
グニ
タッタッ
タッ
ヒェ〜
かかった〜
ガツン!
ムムッ
ピタリ
たすけて〜
ピクピク
ケッ・ケッ・ケムミィ〜
ギャ〜


ウッシシ
ててててて
タァ〜
ててて
ク・ク・ク・ク
ギャッ
ガバッ
グサリ
ててて
ポコン
ムニャ
ムニャ
バタリ
BOOM
たまには
こんなふうに勝ちたいなぁ…
完

ひとりひとこと

阿久津俊昭

笑える事は笑ってすまし
笑えない事も笑いとばす
そんな男に俺はなりたい

伊月浩

「君には無理だよ」
「では、やってみよう」

井上雅由

下組は個性あふれるクラスだったと思う。だから卒業したら各人の個性を伸ばしたらいいんじゃないか

上野仁

卒業したらみんな元気でな
そして、俺のことも忘れるなよ

梅原和彦

すべては、これから何をするかにかかっている

大橋仁美

千日善を行なうとも　善はなお足らず
一日悪を行なえば　悪は常に余にあり
（孫悟空）

などとは及びもつかぬことだ。しかし人間は学生でも労働者でも、たとえ強人や囚人であれ、そしてもし後へ下がるとひきずられているとしても、なんらかの形で前へ踏み出そうとしている。人間はすばらしい

沖島祥介

なんとなく過ごしたあっけない高校時代であった

小堤正一

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかく人の世は住みにくい。ホントにホントに御苦労さん。帝国主義を張子のトラである。則天去私。多情仏心。断金之交莫逆之友は大事なのだ。自分でも何を言ってるのかわからなくなった。これでよく卒業できたもんだ。

駒崎尚宏

卒業は今までのしめくくりでもあり社会への門出でもある

アーゲニキニイクロ（があ　元気に　行こう）

斉藤邦男

"球道一心"

佐々木康雄

「脱日本、イイナー！」

清水はじめ

いよいよ卒業です。考えてみると今までいろいろと思い出に残ることがありました。いつまでも忘れずにいたいですね。さようなら。

霜田勝美

夜の街を雨に濡れながら歩いていると前から男がひとり近ずいて来る。
「よまえじゃないか」「なんだおまえか」
こんな会話がいつでも交わせる友でありたい。

鈴木春幸

愛する早実を去るにあたって、私の目標は
『公害を出すほど大きなカメラ関係の会社を
運営する』ことである。
「早実」それは私が死ぬまで心に焼きついて、る文字
になるであろう。そして棺桶に片足つっこんで自分
をふりかえってみた時、「これでよかった」というような
悔のない人生を過るつもりである
……十年二十年たってからみんなに会うが楽しみ

武井俊憲

「昨日・今日・昨日」

竹内孝男

檻(おり)の中の七年間

月村昭

「明日にむかって今この時を」

中村修二

みなさん卒業おめでとう

野島輝昭

二年のつきあい　一生の友

畑ケ山清治

みなさん健康で

松島勝

新たな目標に向かってがんばろう

渡部薫

時間は待ってくれない
明日(あす)を生きよう。

斉藤竜也

現代高校生気質

立てば○○○○
??

坐われば○○○○

歩く姿は○○○○

勝手に解釈しろ!

池田博

人間は逃げることができる限り
どこまでも
どこまでも
逃げたらいい
逃げる所がどこにもなくなった時
その時人間は初めて
自分を冷静に見つめることが
できる。

三年間長いような短かいような人生であった。

ささやかなあとがき

多数の諸先生及び三F生徒諸君の御協力により三敬新聞最終号が無事発刊されました。

この三敬新聞も高二から高三にかけて七部発行されたわけで創刊号の最初の文を引用してみると

どんな縁あってか普2Fの54名担任ノ名の55名は大げさに言えばこれから2年間運命をともにすることになっています。……

なんてなっています。

もうこれから二年が過ぎてしまったわけです。

この新聞の編集にかかわりあった僕達にとってみればは残酷なまではやい感じがします。できればこの当時にもどりたいような気がします。

では最後に

三敬新聞バンザイー

(編集長代理記)

三敬新聞七号
非売品
昭和46年3月25日発行
編集長 小堤正一
編集委員 井口哲夫
阿久津俊明
霜田勝美
森晶子
その他大ぜい
編集所 三敬新聞編集局
限定出版80部

何を求めて旅立ちますか